

■ PCN だより

PCN Volume 65, Number 4 の紹介

2011 年 6 月発行の *Psychiatry and Clinical Neurosciences* (PCN) Vol. 65, No. 4 には、Frontier Review が 1 本、Review Article が 1 本、Regular Article が 7 本、Short Communication が 5 本、掲載されている。今回はこの中から外国からの投稿された 4 本の内容と、日本国内からの論文については、著者をお願いして日本語抄録をいただき紹介する。

(外国からの投稿)

PCN Frontier Review

1. Comprehensive model of how reality distortion and symptoms occur in schizophrenia: Could impairment in learning-dependent predictive perception account for the manifestations of schizophrenia?

R. R. Krishnan, M. S. Kraus and R. S. E. Keefe
Department of Psychiatry and Behavioral Sciences,
Duke University Medical Center, North Carolina,
USA

統合失調症における現実認知の歪みと症状形成の総合的モデル——学習依存性予見知覚の障害により統合失調症の症状は説明できるか？——

これまでのところ、統合失調症に対応する一定の認知機能プロファイルは明らかにされていない。統合失調症という疾患単位の神経生物学を解明するための重要な第一歩は、統合失調症と呼ばれる疾患群の重要な共通点を明らかにすることにある。クレペリンは統合失調症という疾患群に対して「早発性痴呆は、全体としては疾患としてのまとまりを呈しており、早発性痴呆群にみられる臨床症状の大部分は、単一疾患の病理過程の表出とみなしてもいいとの考えがより強くなっているように思われる」と述べて

いる。

しかしながら単一疾患の病理過程とはいったい何であろうか？ 我々は、細胞増殖の調節不全が全てのガンに共通する欠損として理解されているように、持続する階級的な時間過程の欠損 (persistent defective hierarchical temporal processing) が統合失調症と呼ばれる疾患群に共通する基本的欠陥として存在するという考えを提案したい。この欠陥は、慢性的な記憶の予想における間違いや学習依存性予見知覚の障害として観察されるが、このような障害により認知の歪み (幻覚, 妄想などの思考の異常) を説明することができ、統合失調症と診断される多くの患者の症状とも一致する。本論文ではこのような基本的欠陥がどのようにして統合失調症の症状に至るのかを論じる。

Review Article

1. Reception of Kraepelin's ideas 1900-1960

U. Palm and H.-J. Moller

Department of Psychiatry and Psychotherapy,
Ludwig-Maximilian University, Munich, Germany

クレペリン再考 (1900~1960 年)

クレペリンによる精神疾患の診断体系は DSM-IV や ICD-10 を用いた現代精神医学の診断体系の基礎づくりに大きく貢献した。これらの診断基準の作成におけるクレペリンの影響を考えると、クレペリンの同世代人やその後継者たちがクレペリンの疾病学にどのような対応をしてきたのかという疑問が湧き起こる。この点を検討するために、ミュンヘン、ベルリン、パリの図書館にある歴史的著作について Kraepelin, dichotomy, manic-depressive disorder のキーワードにて検索した。1900~1960 年間の文献

を調べて、現在の診断体系に対するクレペリンの影響について現代の文献と比較した。クレペリンの教科書第6版(1899)では二分法が全体を通してとりいられていたが、引き続き1900~1960年間の二分法とその方法論に対する批判的コメントは3つの時期に分けてみる事ができる。しかしながら全体を通してみるとクレペリンの体系は臨床診断に取り入れられていったようであり、クレペリン100周年を記念する1956年以降に記述された文献は、クレペリンの業績は現代精神医学の基礎となったことを認めている。しかしながら、1960年代後半に始まったネオ・クレペリニズムの動きは、クレペリンの科学的背景や方法論に対してやや異なる見解を提出しているが、クレペリンの二分法に対する批判にもかかわらず、精神疾患の診断の基礎としてはより強固になっているようである。クレペリンの時代に、統合失調症と躁うつ病との二大疾患の重なりあう診断に対して批判が向けられたのと同様に、現代的な批判も同様な内容であり、症候学的な問題を含んだ議論がなされている。

Regular Articles

1. Abnormal sensitivity to negative feedback in late-life depression

A. von Gunten, F. R. Herrmann, R. Elliott and R. Duc

Service Universitaire de Psychiatrie de l'Age Avancé, Département de Psychiatrie-CHUV, Prilly-Lausanne, Switzerland

うつ病高齢者におけるネガティブフィードバックに対する感受性の異常

【目的】認知機能検査におけるネガティブフィードバックに対する感受性が中程度うつ病の高齢者の認知機能に対する作用メカニズムを検討することを目的とした。【方法】中程度うつ病高齢者22名と健常対照者22名についてネガティブフィードバック(誤りを被験者に知らせること)に対する感受性を比較検討した。課題としてコンピューター化されたロンドン塔課題を使用した。【結果】うつ病高齢者群では課題失敗の回数とその程度は、ネガティブフィード

バック後には悪化しておりポジティブフィードバック後にはそのような悪化は認められなかった。抑うつの程度はフィードバック後の失敗数と相関していたが失敗の程度とは相関していなかった。失敗数と程度のいずれもネガティブフィードバックの繰り返しにより悪化しなかった。【結論】うつ病高齢者ではネガティブフィードバックに対する感受性の変化があり、このことによりコンテクスト特異的な認知機能低下が説明できる。

2. Pedometer walking plus motivational interviewing program for Thai schizophrenic patients with obesity or overweight: A 12-week, randomized, controlled trial

W. Methapatara and M. Srisurapanont

Department of Psychiatry, Faculty of Medicine, Chiang Mai University, Chiang Mai, Thailand

タイにおける肥満・体重増加を呈する統合失調症患者に対する万歩計と動機付けインタビュー(PWMI)プログラムの検討——12週間ランダム割り付け比較対照試験——

【目的】肥満・体重増加の統合失調症患者に対する万歩計歩行と動機付けプログラム(Pedometer walking plus motivational interviewing; PWMI)の有用性を検討する。【方法】BMI 23.0以上の中等症の統合失調症患者について12週間のランダム割り付けオープン比較対照試験を行った。両群の対象者に健康なライフスタイルについての小冊子を与えた。1週間のPWMIプログラムは5回の1時間の動機付けのためのインタビュー、グループ教育、ゴール設定、歩行からなる。0週、4週、8週、12週の体重、身長、BMI、腹囲を測定し、万歩計を与えた群の体重変化を評価した。【結果】64名の参加者を万歩計群と対照群とにランダムに割り付けた。全ての対象者がプログラムを終了した。12週後の体重にのみ有意差が認められ($p=0.03$)、万歩計群は対照群と比較して2.21 kg (95% confidence interval of 4.12 to 0.29)の体重減少が認められた。【結論】PWMIプログラムは統合失調症患者の体重とBMIの減少に有効であり、この有用性は認知行動療法に匹敵するものであ

るが、さらに患者数を増やしての検討が期待される。

Short Communications

Distress due to lithium-induced polyuria: Exploratory study

B. K. Pradhan, S. Chakrabarti, A. S. Irpati and R. Bhardwaj

Department of Psychiatry, PGIMER, Chandigarh, India

リチウム誘発性の頻尿とその障害についての予備的検討

リチウムによる頻尿はよくみられるもののしばしば見逃されている。リチウムを長期使用している56名の双極性障害患者について、頻尿の訴え、それによる苦悩、社会的機能障害を調査した。全患者の24時間蓄尿と腎機能検査を行った。頻尿(3L以上の24時間尿量)は70%に観察されたが、直接に質問されない限り頻尿は訴えられなかった。頻尿・多尿による日常生活上の障害は24時間尿量と比例していたが、頻尿はリチウム投与に伴う副作用の1つであり、今まで以上に注意されるべきである。

(文責: 武田雅俊 PCN 編集委員長)

(日本国内からの投稿)

Regular Articles

1. Mortality 6 years after inpatient treatment of female Japanese patients with eating disorders associated with alcoholism

K. Suzuki, A. Takeda and A. Yoshino

アルコール依存症を併存した女性の摂食障害の、入院治療の6年後における死亡率

【目的】この研究はアルコール依存症を併存した摂食障害患者の死亡率を明らかにしようと考えた。そのために、入院治療を受けてから6年を経過した、アルコール依存症を伴う摂食障害患者について、アルコール依存症を伴わない摂食障害患者と、摂食障害を伴わないアルコール依存症の患者の死亡率とを比較した。【方法】対象は、1990年から1998年の間に、独立行政法人国立病院機構久里浜アルコール症

センターにおいて入院治療を受けた、30歳以下の女性の摂食障害とアルコール依存症の患者164名である。対象者に対しては、入院時にアルコール問題、食行動異常、精神的問題、その他の臨床的特徴などについて半構造化面接を行った。転帰調査は2001年12月に実施し、対象者の100%を追跡することができた。【結果】47名のアルコール依存症を伴う摂食障害患者と、86名のアルコール依存症を伴わない摂食障害患者と、31名の摂食障害を伴わないアルコール依存症患者の、入院治療を受けて6年後のそれぞれの死亡率は27.7%、3.5%、19.4%であり、有意差が存在した。Kaplan-Meierの生存率曲線で比較すると、アルコール依存症を伴う摂食障害患者の死亡率は、アルコール依存症を伴わない摂食障害患者の死亡率と比較して有意に高かったが、摂食障害を伴わないアルコール依存症の死亡率とは有意の差は存在しなかった。6年後の追跡におけるアルコール依存症を伴う摂食障害の13名の死亡者のうち、5名は神経性食欲不振症であり、7名は神経性過食症であった。【結論】この研究結果は、アルコール依存症の併存は、神経性食欲不振症だけでなく、神経性過食症においても、死亡に至る主要な因子であることを示唆している。

2. Correlations between the offensive subtype of social anxiety disorder and personality disorders

T. Nagata, H. Matsunaga, I. van Vliet, H. Yamada, H. Fukuhara, C. Yoshimura and N. Kiriike

他者影響型社交不安障害(重症対人恐怖症)とパーソナリティ障害の関連

【目的】近年、他者影響型社交不安障害(重症対人恐怖症)が、もはや文化結合症候群(文化依存症候群)ではなくなったのではないかと報告されているが、現代的手法を用いた臨床特徴の報告は数少ない。そこで、他者影響型と非他者影響型の社交不安障害の2群間でI軸診断とパーソナリティ障害の併存率を検討した。【方法】DSM-IV診断基準で社交不安障害と診断された139例を対象に半構造化面接によるI軸診断、パーソナリティ障害の併存率、およびLiebowitz Social Anxiety Scale (LSAS)得点を

検討した。【結果】42例(37%)が他者影響型と診断された。他者影響型と非他者影響型の社交不安障害の2群間において臨床背景やI軸障害診断にほとんど有意な差を認めなかった。ロジスティック回帰分析の結果、他者影響型と両親からの過度の体罰、LSAS得点、強迫性パーソナリティ障害が関連していた。【結語】山下(1977)は「極端に過保護ないし愛情過多」や「保護的」な環境で育った患者が半数以上を占めると報告しているが、現代の他者影響型は幼少時の環境に問題が多く、社交不安障害としてより重症で、柔軟性を欠くパーソナリティを示していた。また、本研究では他者影響型と非他者影響型には本質的な質的な差がない可能性も示された。

3. Screening for diabetes using Japanese monitoring guidance in schizophrenia patients treated with second-generation antipsychotics: A cross-sectional study using baseline data

I. Kusumi, K. Ito, M. Honda, T. Hayashishita, K. Uemura, N. Hashimoto, M. Murasaki, Y. Atsumi, T. Kadowaki and T. Koyama

日本のモニタリングガイダンスを用いた第二世代抗精神病薬服用中の統合失調症患者を対象とした糖尿病のスクリーニング：ベースライン・データを用いた横断的検討

【目的】第二世代抗精神病薬服用中の統合失調症患者を対象としたわが国独自の血糖モニタリングガイダンスが新たに開発されている。それらの患者に潜在する糖代謝障害を日常臨床の中で系統的に検出し、その頻度を検討することを目的に、日本のモニタリングガイダンスのベースライン・データを用いて、横断的検討を行った。【方法】2008年6月から2009年1月までに血糖モニタリングを開始され、それ以前には糖尿病と診断されていない537例の統合失調症患者のデータを25病院の医療記録から収集した。評価項目は、血糖値(空腹時または随時)、ヘモグロビンA1c値、血清脂質値、身長・体重、糖尿病を示唆する臨床症状、糖尿病の家族歴である。患者は、血糖値またはヘモグロビンA1c値に応じて、正常型、境界型、糖尿病を疑う型に分類され、その3型間で

様々な臨床背景や血清脂質値を比較検討した。【結果】537例中13例(2.4%)が糖尿病を疑う型に、51例(9.5%)が境界型に、473例(88.1%)が正常型に分類された。糖尿病を疑う型の患者は、正常型の患者に比較して、Body Mass Indexが高く、糖尿病の家族歴が高頻度であった。【結論】モニタリングのベースライン・データから、第二世代抗精神病薬服用中の統合失調症患者の11.9%で糖代謝障害が存在することが判明した。このガイダンスにおける糖尿病の検出率とその有用性を評価するためには、さらに縦断的な検討が必要である。

4. Statistical power and effect sizes of depression research in Japan

Y. Okumura and S. Sakamoto

日本における抑うつ研究の検定力と標本効果量

【目的】効果量の大きさの基準の妥当性を検討している研究は少ない。また、検定力を検討している先行研究の多くは、かなり広い研究領域で検討している。本研究では、日本の抑うつ研究における、(1)検定力を推定すること、(2)現実的な目標効果量を推定することを目的とした。【方法】日本の精神医学と心理学における18の代表的な学術誌を系統的に展望した。出版年は1990年から2006年に限定し、935の論文から974の該当する研究が同定された。【結果】臨床群を使用することは、検定力が不十分になる(80%/50%未満)ことと強く関連していた。中程度の母集団効果量を想定した場合、臨床群を使用している研究の80%は検定力が80%未満であること、臨床群を使用している研究の44%は検定力が50%未満であることが明らかになった。加えて、研究の特性から、現実的な目標効果量を推定するための予測モデルを構築した。【結論】「真」に差異や関連のある事象であっても、抑うつ研究者の大部分は、コイントスをするよりも、正しい検定結果を得られていない可能性が高い。研究を実施する前に、検定力分析を実施できるよう、研究者に普及啓発することが重要である。

5. Midbrain volume increase in patients with panic disorder

A. Fujiwara, T. Yoshida, T. Otsuka, F. Hayano, T. Asami, H. Narita, M. Nakamura, T. Inoue and Y. Hirayasu

パニック障害患者における中脳体積の増加

【目的】パニック障害 (PD) における最近の研究において大脳皮質, 辺縁系, および脳幹の異常が報告されているが, PD の病態生理における中脳の関与は不明である。本研究の目的は magnetic resonance imaging (MRI) を用いて PD における中脳の構造的変化を確認し, 中脳体積と PD の臨床症状評価との関連性を調べることである。【方法】38 名の PD 患者 (PD 群) と健常者 (HC 群) 38 名が本研究に参加した。高解像 MRI を使用して, マニュアルトレース法により中脳体積が測定された。PD 群における体積変化と臨床症状および社会的機能との関連を検討するために, パニック障害重症度評価尺度 (Panic Disorder Severity Scale, PDSS) と全般的社会機能 (Global Assessment of Functioning, GAF) を用いた。【結果】PD 群は HC 群と比べ中脳の相対体積が大きかった。中脳腹側部の相対体積は両群で有意差を認めなかったが, PD 群は中脳背側部の体積増加を認めた。PD 群において中脳背側部の体積と PDSS 総得点の間に有意な正の相関を, GAF 得点との間に負の相関を認めた。【結論】本研究の結果は, 中脳背側部が PD の病態生理と関連している可能性を示す。また, 中脳体積の増加は PD の重症度を反映することが示唆された。

Short Communications

1. 'Time slip' phenomenon in adolescents and adults with autism spectrum disorders: Case series

S. Tochimoto, K. Kurata and T. Munesue

青年期・成人期の自閉症スペクトラム障害患者に見られた“タイムスリップ”現象—ケースシリーズ

青年期・成人期の自閉症スペクトラム障害 (ASD) の患者が, 時として精神科医療機関を受診することに近年関心が集まるようになった。さらに,

少数ではあるが, 暴力的な行為に関与し, 精神科救急や司法精神医学の対象となる例もある。筆者らは本論文において, “タイムスリップ”現象を呈して精神科救急を受診した ASD 患者の 2 症例について報告し, 本現象の臨床的な重要性について検討を加えた。

2. Hallucination induced by paroxetine discontinuation in patients with major depressive disorders

N. Yasui-Furukori and S. Kaneko

パロキセチンの中断により誘発された幻覚

中断症候群は, 選択的セロトニン再取り込み阻害薬をはじめ, ほとんどすべての種類の抗うつ薬の中止時にみられる。我々は, パロキセチン中止後に典型的中断症候群に加えて幻視と幻聴を体験した 2 症例を経験した。症例 1 は, パロキセチン 20 mg/日を自己中断した 2 日後に, めまい, 頭痛, 不眠症, 吐き気と悪夢に加え, 幻視と幻覚が認められた。症例 2 は, 抑うつ症状改善後, パロキセチンの投与量を漸減した。5 ヶ月間 10 mg を維持した後, パロキセチンを中止した。パロキセチン中止 3 日後に, 吐き気, めまい, 疲労と不安といったいくつかの徴候に加え幻視, 幻聴を体験した。今回のケースにより, 幻覚がパロキセチン中断症候群に存在することがあり, 留意すべき症候と思われた。

3. Blonanserin in the treatment of delirium

K. Kato, K. Yamada, M. Maehara, F. Akama, K. Kimoto, M. Saito, H. Yano, A. Ichimura and H. Matsumoto

せん妄に対する blonanserin の有効性と安全性の検討

【目的】せん妄は軽度の意識障害を背景に, 精神症状として気分障害, 精神運動興奮, 幻覚, 認知機能障害, など多彩な病像を伴う意識変容を呈する病態である。せん妄は総合病院に入院した患者の約 10% から 30% に出現し, 入院期間の遷延や死亡率を増加させる要因の一つである。本研究の目的は, 当院救命救急センターに入院となったせん妄の患者に対する blonanserin の有効性と安全性について検討することである。【方法】当院救命救急センターに入院と

なりせん妄と診断され抗精神病薬を投与された32名の患者(連続サンプル)を対象としている。治療の評価スケールとし Memorial Delirium Assessment Scale (MDAS) を使用した。【結果】MDASは 19.9 ± 3.2 (治療開始時) から 5.9 ± 3.8 (治療終了時) に著しく減少した ($P > 0.05$)。24.1%の患者に副作用が出現したが、重篤な副作用は認めなかった。【結論】救命救急センターにおけるせん妄に対して blonanserin は有効であり、安全性も高い可能性がある。

4. Does the volume of internet searches using suicide-related search terms influence the suicide death rate: Data from 2004 to 2009 in Japan

H. Sueki

自殺に関するインターネット検索は自殺率に影響を与えるか? : 日本における2004~2009年のデータの検討

本研究では、自殺に関する検索語の検索ボリュームと自殺率との相互相関を検討した。Googleにおける検索と人口動態統計における自殺率のデータを分析した結果、「自殺」「自殺方法」という検索語は自殺率との関連を示さなかった。自殺率の増加はその後の「うつ」という語の検索量の増加を予測することが示唆された。総じて、自殺関連語の検索はその後の自殺率の増加に寄与していなかった。

(精神神経学雑誌編集委員会)